

# 中国の医療・衛生事情について



在中国日本国大使館  
領事部 西川 昌登

# 目次

1. 総論（衛生・医療事情一般）
2. 注意すべき病気・怪我
3. 参考（参考文献等）



# 1. 総論（衛生・医療事情一般）



# 1. 総論（衛生・医療事情一般）

## （1）衛生事情

- 国土が広く気候も様々だが、北京等では夏期40度を超える日もあり熱中症、日射病には注意が必要。南方を除き、冬期は乾燥が著しく、脱水や皮膚のトラブルを起こしやすい。
- 全国的に大気汚染が深刻、呼吸器症状やアレルギーが出やすい状況。
- 水道水は、硬水のため下痢症状を起こし易い。原則ミネラルウォーター、水道水を使用する場合、煮沸後に使用。
- 食品は、野菜や果物、卵は十分に水洗いを。肉・魚・卵は十分に火を通す。
- 北京など大都市では特に注意を要する風土病はないが、最近、出稼ぎの増加、急激な都市化などで、都市部でも狂犬病、肝炎などが多発。
- 農村部では、保健衛生環境の不備から、B型肝炎、エイズ、結核、住血吸虫症をはじめ風土病には注意が必要。



# 1. 総論（衛生・医療事情一般）

## （2）医療事情

○ 医療機関の多くは、衛生行政部門（公立）が設置。都市部では、1～3級まで（3級が最大）の病院と社区卫生センターによる機能分化を実施。近年、3級病院では、移植治療など医療水準は向上。

○ 農村部は、県級病院を筆頭に、その下の郷・鎮の衛生院、村の衛生室を基礎とした3段階の医療衛生サービス網を形成。医療機器、薬剤、医師の質、衛生環境ともに低水準。

（参考1）医学部卒業が医師受験資格だが、農村部では医師不足のため、中・高校卒業後に一定期間の実務研修を終え、医師になった者（医療補助を行うとされている）も存在。

●医師数：279.5万人（千人当たり2.06人）

（うち「医師」資格者：228.6万人（2013年））

（※日本の場合：千人当たり2.37人（2012年））

●看護師数：278.3万人（千人当たり看護師数：2.05人）

（※日本の場合：千人当たり11.2人（助産師などを含む））

（参考2）●ベット数：千人当たり4.55床（2013年）（※日本の約4分の1）



# 1. 総論（衛生・医療事情一般）

## （3）医療事情

- 北京などの大都市には、外国人専用外来を持つ中国系総合病院や英語、日本語で先進国と同様の医療が受けられる外資系クリニックがある。
- 外資系では、日本より高額な医療費（緊急入院1日10～20万円）を請求されることもあり、**短期滞在でも海外旅行者保険など保険加入が必須**。
- 中国系病院を受診する場合、一般的に最初に窓口で受付料を支払い、診察医を指名（医師のランクにより診察料が異なる）するなど、医療費の支払方法が日本とは異なることに留意が必要。

（参考）カルテ作成料として1～5元を請求される場合や、入院や検査では受付時に保証金（長期入院と判断されれば数万元の病院もある）を預けなければならないことが多い。これらの現金も、保険に加入していれば不要の場合もあり、保険加入時にキャッシュレスサービスが付加している保険を選ぶ方が無難。

（4）緊急時の連絡先      救急車：120（北京は999も）



## 2. 注意すべき病気・怪我



## 2. 注意すべき病気・怪我

### (1) 下痢症

- 多くの下痢症は、ウイルスや細菌に汚染された食物を摂取することによる感染性胃腸炎。暑くなる5~10月に食中毒、赤痢、腸チフス等の経口伝染病が見られる。
- 予防策としては、生水を飲まない、露天等で買い食いをしない、サラダ・果物・牛乳・乳製品・生の魚介類・肉類に注意が必要。数年、都市の衛生事情は改善され過度の心配は不要だが、時には重症化し専門的治療が必要となる事もあり、激しい嘔吐・下痢・血便が出る場合、医療機関を受診する必要がある。

### (2) 寄生虫

- 大都市では少なくなったが、依然として回虫・蟯虫等の感染が認められている。虫卵に汚染された生野菜の摂取が原因。現在、化学肥料と農薬の使用が一般的で、寄生虫疾患は減少しているが、むしろ、残留農薬が問題で、野菜等は良く洗うことが必要（例：チンゲン菜）。
- 湖・河川地域では住血吸虫病が発症。撲滅運動により湖・河川地域の環境整備が始まり、患者は減少傾向にあるが、住血吸虫は皮膚から侵入するため、河川や湖の水には触れないよう注意が必要。



## 2. 注意すべき病気・怪我

### (3) マラリア

- 発症率の高い地域は中国南部海南省、雲南省。湖北、貴州、四川、広東を加えた6省で全国84%を占める（2014年、全国2,921人）。一方、標高1,500m以上の地域ではマラリアの危険はほとんどなく、上記の全地域でマラリアに汚染されているわけではないため、**必要に応じ防蚊対策など地域に応じた予防策を。**

### (4) HIV感染・エイズ、性感染症

- 85年に初めてHIV/AIDS感染者が確認されてから毎年、増加傾向（2011年、累計感染者78万人）。**08年3月から全国死亡数トップはエイズ（2014年、45,145人が新たに感染、同年中に12,030人が死亡（感染症の死因第1位））。**
- 感染経路は、血液を介するもの（麻薬の静脈注射など）や性的接触が多い。近年、男性同士の性感染者が増加や若者の発症例が増加。
- その他、**淋病や梅毒といった性病患者も多く、十分に注意が必要。**



## 2. 注意すべき病気・怪我

### (5) 肝炎

- 汚染された水や食べ物から感染するA型・E型肝炎と、汚染された血液や体液により感染するB型・C型肝炎が多く見られ、年間最も多くの感染者が報告されている（2014年ウイルス性肝炎（1,223,021人）のうち、A型25,969人、B型935,702人、C型202,803人、E型26,988人）。
- A型・E型は、都市では散発的だが、地方では流行することもある。E型は、南部地域に多く、妊婦は重症化することがある。A型の予防策としてワクチンがあるが、E型のワクチンはなく、妊婦は特に飲食物の衛生に注意が必要。
- B・C型は、共に血液・体液を介し感染。主に感染血液の輸血と感染者との性的交渉を避ける必要がある。中国にはキャリアと呼ばれるウイルス保有者が大変多く注意が必要。B型はワクチンによる予防接種が可能。  
なお、肝炎の死亡数は常に上位（2014年、515人（感染症死因第4位））を占め、また、ウイルス性肝炎は伝染病扱いとなっており、強制的に隔離入院となることがある。



## 2. 注意すべき病気・怪我

### (6) 結核

- 年間発症人数は90万人といわれ、年間の死亡者数も多い（2014年、2,240人が死亡（感染症死因第2位））。近年、全国予防治療計画を実施し、予防治療を進めているが、①農村部（特に西部）の流行が顕著、②発症者のうち受診は約半数、③多剤耐性結核病の感染が多いなど課題は多く、死亡原因の上位に位置。

### (7) 狂犬病

- 最近は非常に増え、北京等でも感染の報告あり（2014年、924人が発症、854人が死亡（感染症死因第3位））。発病するとほぼ100%死亡。ウイルスを保有する動物は、犬のみならず、猫、コウモリ、狐なども。また、傷口をなめられたただ唾液から感染するため、動物に接する可能性が高い場合、ワクチン接種を。また、できるだけ動物に近づかない、咬まれたりした場合、傷口を流水で洗浄し、可及的速やかに医療機関を受診する。



## 2. 注意すべき病気・怪我

### (8) 鳥インフルエンザ(H7N9型)

- 13年3~5月にかけて感染が拡大、夏に収束するかに見えたが、10、11月に新たな感染が報告。14年に入り収束が見られたものの、13年同様、11月以降再び感染が報告され、2014年は330名が発症、135名が死亡。15年1月に入り、南方（広東、浙江、江蘇、福建等）を中心に急増したが、現在、収束している。

2014/12	感染数19人	うち死亡4人
2015/1	感染数83人	うち死亡28人
2015/2	感染数59人	うち死亡27人
2015/3	感染数20人	うち死亡18人
2015/4	感染数6人	うち死亡8人
2015/5	感染数15人	うち死亡6人
2015/6	感染数5人	うち死亡4人（※7、8月は新たな感染報告は無い）

- 感染者の大半は、生きた家禽との接触又は生きた家禽を扱う市場との接点があり、以下の予防策等が重要。
  - ・ 生きた鳥を扱う市場や家禽飼育場への立入を避ける。
  - ・ 死んだ鳥や放し飼いの家禽との接触を避ける。
  - ・ 鳥の排泄物に汚染された物との接触を避ける。
  - ・ 手洗い、うがいにつとめ、衛生管理を心がける。
  - ・ 外出する場合、人混みは出来るだけ避け、人混みではマスクをする等の対策を心がける。
  - ・ 突然の発熱や咳など、呼吸器感染症の症状が現れた場合、速やかに最寄りの医療機関を受診する。



## 2. 注意すべき病気・怪我

### (9) 大気汚染による症状

- 結膜炎や気管支炎、肺炎などの直接的な疾患に加え、精神的な影響による疲労感や不安感による鬱病、頭痛などの疾患にも留意が必要。うがい、マスクなどの身体の衛生管理とともに、空気清浄器、加湿器などの室内環境の管理、家族内のコミュニケーション、適度な運動などの精神衛生の管理も必要。

### (10) 慢性疾患など

- 心臓病、脳血管障害、がん、糖尿病などの慢性疾患が、急速な都市化の加速などに伴い増加。慢性疾患患者は、11年現在、2億6,000万人、毎年800万人が死亡と言われている。
- さらに、近年、精神疾患も増加し、11年現在、重度精神疾患患者は、302万6,000人とも言われている。また、駐在員やその家族の中にも鬱などの精神疾患を発症する者も多いと言われ、大気汚染などに起因する子ども・家族とのトラブルや社内での人間関係、本社との関係などが主な原因と言われている。
- 飲酒などの食生活（白酒など）や、喫煙などの生活習慣の改善のほか、適度な運動など予防策を。



## 2. 注意すべき病気・怪我

### (1 1) 手足口病

- 2014年の感染者は、278万人、501人が死亡し、毎年晩春から初夏（5月～7月）にかけてピークに（※今年4月173,384人（死亡15名）、5月304,863人（同26名））。
- 日本では、死亡する例は殆どなく、この病気に対し過度の心配は必要ないが、**感染者は主に乳幼児・小児で、その症状は発熱、手・足・口に発疹・水疱が見られる。**ほとんどの人が1週間から10日程度で自然に治るが、まれに髄膜炎等の中樞神経症状が発生し、入院が必要となる。感染経路は経口、飛沫、接触。

### (1 2) 交通事故

- 都市部を中心に車の数が急増。北京では現在、1日約1,000台ずつ車が増えているとも言われ、マナーが悪く事故が急増。現在、交通事故死亡数は世界一。特に、日本の規則とは大きく違うところがあるため、歩行中、運転中、いずれも十分に注意が必要。



### 3. 参考（参考文献等）



### 3. 参考（参考文献等）

○在中国日本国大使館（健康・生活）（※北京の医療機関リストや感染症情報等を掲載。）

[http://www.cn.emb-japan.go.jp/consular\\_j/life\\_j.htm](http://www.cn.emb-japan.go.jp/consular_j/life_j.htm)

○外務省海外安全ホームページ（※世界各国のテロなどの安全情報、医療情報等が掲載。）

<http://www.anzen.mofa.go.jp/index.html>

○感染症全般に関する情報（厚生労働省）

[http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou\\_iryuu/kenkou/kekkaku-kansenshou/index.html](http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekkaku-kansenshou/index.html)

○海外渡航者のための感染症情報（厚生労働省検疫所）

<http://www.forth.go.jp>

○北京日本人会

- ・安全ハンドブック（2015年度改訂版）

- 健康などの情報以外に、防犯対策や緊急事態の対処要領などを記載したハンドブックで、日本人会の会員か否かに関わらず、北京日本人会及び大使館で配布。

- ・医療ハンドブック（2015年改訂版）

- 北京にある医療機関のリスト、概要などを掲載するとともに、注意すべき病気などの情報を掲載。日本人会会員のみに配布。

